

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	<p style="text-align: center;">内海 緒香 【人間発達科学専攻 平成22年度生】</p>	要 旨
論文題目	<p>青年の養育認知に関する研究 —自尊感情・適応との関連—</p>	<p>本論文は、親の価値観から自律しつつある青年期の子どもの主観的視点から捉えた養育認知の実態について調べるとともに、子どもの適応との関連を探り、養育認知の意義や機能を明らかにすることを目的としてまとめられた。</p> <p>青年期の養育と適応的問題に関する内外の先行研究をまとめた序論に続き、研究1では面接調査によって青年期の養育に関する質的な分析を行い、親が子どもの家庭内外での行動や友人関係、活動に関する情報を収集し（モニタリング）子どもの行動を統制しようとする“行動統制”と、子どもの自己決定に介入し指示する“心理的統制”の2つの養育の機能に注目するとともに、それが子どもの生活のどの領域（友人選択や服装などの個人領域・社会的ルールに関する慣習的領域・安全や健康に関する領域）に発揮され、子どもがそれらをどのように認識するかが青年の適応にとって重要であり、これらの概念を整理しつつあらたな青年期用の養育認知尺度を構成する必要性が論じられた。</p> <p>研究2・3の予備的調査を経て、研究4では、中学生から大学生までのサンプル（$N = 1,043$）により、新たに作成された3因子構造の青年期養育認知尺度（肯定的・受容的な情緒的関わり・心理的統制・モニタリング）の妥当性・信頼性に関する心理測定学的検討がおこなわれた。その結果、青年期養育尺度の三つの下位尺度は、それぞれ十分な内的信頼性と再テスト信頼性を示し、子どもの自尊感情と問題行動傾向などの構成概念妥当性の検討においても、概ね、先行研究に合致した関連がみられ、他の既存の養育尺度との併存妥当性も示された。研究5では、中高生（$N = 224$）サンプルによる2時点縦断調査により、3種類の養育認知、自尊感情、リスク行動の時間的な変化と、性別と学年によるレベルの違いが調べられた。研究6では、自尊感情を媒介とした養育認知と子どものアウトカムとのプロセス、および、養育認知のパターンとアウトカムとの関連について、先行研究の知見をもとにした仮説を検証した。またクラスター分析によって3因子の組み合わせによる親の類型化と子どもの適応との関連について検討がおこなわれた。</p> <p>最終章では全体の総括から、青年期の子どもの心理社会的適応を考えるうえで、子どもがどのように親の行動を解釈し受け止めているか探ることの重要性について言及するとともに、今回の結果と先行研究との関連性について考察がなされた。また、本研究の限界性の吟味とともに、養育認知に関する今後の研究の方向性、臨床や関連する研究分野への本論文の貢献について述べられた。</p>
審査委員	(主査) 教授 菅原 ますみ	
	教授 内藤 俊史	
	教授 大森 美香	
	准教授 上原 泉	
	准教授 富士原 紀絵	